分布定数系流出モデルの集中化手法に関する考察

Lumping method of distributed parameter runoff models

```
    (財)日本気象協会北海道支社 ○正 員 臼谷友秀(Tomohide Usutani)
    (財)日本気象協会北海道支社 フェロー 藤田睦博(Mutsuhiro Fujita)
    (財)日本気象協会北海道支社 小倉 勉(Tsutomu 0gura)
    (財)日本気象協会北海道支社 奈良 慶(Kei Nara)
    (財)日本気象協会釧路支店 須藤哲寛(Norihiro Sudo)
    (財)日本気象協会旭川支店 河見博文(Hirofumi Kawami)
```

1. はじめに

これまで分布定数系流出モデルを集中化して数多くの 集中定数系のモデルが発表されている.採用されている 集中化手法を大別すると以下のようになる.

集中化手法 {(1) 基礎式の空間平均¹⁾ {(2) 等価周波数伝達関数の導入

(1)の手法は、多くの研究者によって採用されて手法である。
 (2)は最近藤田らによって提案された手法である²⁾.
 ここでは、(1)、(2)の手法を kinematic wave 式を介して比較、検討する。

2. 基礎式

図-1 に示す任意の河道網流域における i 番目の部分 流域に着目し斜面域,河道域ともに kinematic wave 式で 記述できるものとする.

斜面域

$$\frac{\partial h_{i,\delta}}{\partial t} + \frac{\partial q_{s,i,\delta}}{\partial x} = r(t) \qquad 0 \le x \le l_{s,i,\delta} \tag{1}$$

$$q_{s,i,\delta} = \alpha_{i,\delta} h_{i,\delta}^{p_s} \tag{2}$$

$$\begin{cases} h_{i,\delta}(t,0) = h_{i,\delta}(0,x) = 0\\ q_{s,i,\delta}(t,0) = q_{s,i,\delta}(0,x) = 0 \end{cases}$$
(3)

$$\alpha_{i,\delta} = \frac{\sqrt{\sin(\theta_{s,i,\delta})}}{n_{s,i,\delta}} \tag{4}$$

$$\delta = 1, 2$$

 $h_{i,\delta}$:水深 $q_{s,i,\delta}$:単位幅流量 $l_{c,i,\delta}$:斜面長 $\theta_{s,i,\delta}$:傾斜角 $n_{s,i,\delta}$:等価粗度係数 p_s :定数 $\delta = 1,2$ は左右岸斜面を表している.

河道域

$$\frac{\partial a_{i}}{\partial t} + \frac{\partial q_{c,i}}{\partial y} = \sum_{\delta=1}^{2} q_{s,i,\delta}(t, l_{s,i,\delta}) \qquad 0 \le y \le l_{c,i}$$
(5)

$$q_{c,i} = \beta_i q_{c,i}^{p_c} \tag{6}$$

$$q_{c,i}(t,0) = \begin{cases} 0 & (外部リンク) \\ q_{c,i}(t,l_{c,i-1}) + q_{c,i-2}(t,l_{c,i-2}) & (7) \\ & (内部リンク) \end{cases}$$



図-1 任意の河道網流域

$$\beta_i = \frac{\sqrt{\sin(\theta_{c,i})}}{n_{c,i} W_i^{2/3}} \tag{8}$$

 a_i :流積 $q_{c,i}$:河道流量 $l_{c,i}$:河道長 $n_{c,i}$:粗度係数 W_i :河道幅 p_c :定数 式(8)では、河道幅 W_i の長方形断面水路を想定している. また、式(1)~(4)、式(5)~(8)における添え字のs,cは slope と channel を意味している。斜面域、河道域ともに Manning 則を適用する。

$$p_s = p_c = \frac{5}{3} \tag{9}$$

いま,式(1)~(8)を用いて,図-1の河道末端からの 流出量 q_{c,n}(t,l_{c,n})を求めようとすると,式(1)~(8)に与 えるべきパラメータの数は,10n個となる.本論文では, 式(1)~(8)を対象に求めた集中定数系の流出モデルに含 まれるパラメータが,上述の10n個のパラメータより計 算できる集中化手法について検討するものである.降雨 量と流出量の実測資料に基づいて集中定数系のモデルパ ラメータを推定する手法と異なっている.

3. 基礎式の空間平均による集中化

実用的な観点からは、斜面域の支配方程式(1)、(2)お よび河道域の支配方程式(5)、(6)を集中化した結果が必 要であるが、本論文では斜面域における基礎方程式の集 中化手法に限定して記述する.紙面の制約条件と集中化 手法の相違点を理解するには斜面域の集中化で十分であ



図-2 矩形降雨の $S_{xi\delta} \sim Q_{xi\delta}$ 関係

ると考えたからである.

計算および記述を容易にするために基礎式を無次元化 する.いま,*の付いた量を無次元化基準量として,式 (10)を考える.大文字の量は,小文字の量に対応する無 次元量である.

$$\begin{cases} t = t_*T \quad x = x_*X \quad h_{i,\delta} = h_{i,\delta^*}H_{i,\delta} \\ q_{s,i,\delta} = q_{s,i,\delta^*}Q_{s,i,\delta} \quad r = r_*R \end{cases}$$
(10)

無次元化基準量として式(11)を与える.

$$\begin{cases} x_* = l_{s,i,\delta} \quad r_* = \overline{r} \quad q_{s,i,\delta,*} = \overline{r} l_{s,i,\delta} \\ h_{i,\delta,*} = \left\{ \frac{\overline{r} l_{s,i,\delta}}{\alpha_{i,\delta}} \right\}^{1/p_s} \quad t_* = \left\{ \frac{(\overline{r})^{1-p_s} l_{s,i,\delta}}{\alpha_{i,\delta}} \right\}^{1/p_s} \quad (11)$$

式(10),(11)を用いて,無次元基礎式として式(12)~(14) を誘導できる.

$$\frac{\partial H_{i,\delta}}{\partial T} + \frac{\partial Q_{s,i,\delta}}{\partial X} = R \quad 0 \le X \le 1$$
(12)

$$Q_{s,i,\delta} = H_{i,\delta}^{p_s} \tag{13}$$

式(12)の両辺を区間[0,1]の範囲でXに関して積分し,式(15)を得る.

$$\frac{dS_{s,i,\delta}}{dT} + Q_{s,i,\delta}(T,1) = R \tag{15}$$

$$S_{s,i,\delta}(T) = \int_{0}^{1} H_{i,\delta}(T, X) dX$$
(16)

式(16)の $S_{s,i,\delta}$ は無次元単位幅貯留量を表している.式(15)の $Q_{s,i,\delta}(T,1)$ は、斜面末端における無次元単位幅流量で、斜面流出量になっているので以後 $Q_{s,i,\delta}(T)$ と記述する.

 $S_{s,i,\delta} \sim Q_{s,i,\delta}$ 関係を与えると,式(15)より $Q_{s,i,\delta}$ を計算できる. $S_{s,i,\delta} \sim Q_{s,i,\delta}$ 関係は貯留関数なので,基礎方程式の空間平均手法によって集中化された集中定数系のモデルは貯留関数法に帰着することがわかる. $S_{s,i,\delta}$ は,式(17)より計算できる.

$$S_{s,i,\delta}(T) = \int_{0}^{T} \left\{ R - Q_{s,i,\delta}(\tau) \right\} d\tau$$
(17)

式(18)は、矩形降雨波形を対象に $S_{s,i,\delta} \sim Q_{s,i,\delta}$ 関係を



 $S = - \left\{ \begin{array}{l} Q_{s,i,\delta}^{1/p_s} - \frac{1}{(1+p_s)R_0} Q_{s,i,\delta}^{(1+p_s)/p_s} \\ (ハイドログラフの上昇期) \\ (N_f ドログラフの上昇期) \\ (p_s - 1) Q^{1/p_s} + \frac{1}{(1+p_s)/p_s} (18) \end{array} \right\}$

$$S_{s,i,\delta} = \begin{cases} \frac{Q_s}{p_s} Q_{s,i,\delta}^{(i,p_s)} + \frac{Q_s}{p_s(1+p_s)R_0} Q_{s,i,\delta}^{(i+p_s)/P_s} \end{cases} (18) \\ (ハイ ドログラフの下降期) \\ 0 \le Q_{s,i,\delta} \le R_0 \end{cases}$$

図-2は、矩形降雨の無次元降雨強度を $R_0 = 1,2,4,5$ としたときの $S_{s,i,\delta} \sim Q_{s,i,\delta}$ 関係を表している. 図-2の破線は、式(19)を示している.

$$S_{s,i,\delta} = \frac{p_s}{1+p_s} Q_{s,i,\delta}^{1/p_s}$$
(19)

この式は、式(18)において最大流量時における貯留量を 連ねた線になっている.

式(19)は矩形降雨を対象にして求めたので任意の降雨 形への適合性を検討しておく必要がある.ここでは図-3 に示す三角形降雨波形を用いて $S_{s,i,\delta} \sim Q_{s,i,\delta}$ を求める. 図-4 は、式(20)の値を用いて計算した $S_{s,i,\delta} \sim Q_{s,i,\delta}$ 関係を示している.

$$R_p = 2, 3, 4, 5$$
 $T_p = 2$ $T_r = 5$ (20)

図-4 の破線は式(19)を示している. 三角形降雨波形 であっても式(19)が成立していることがわかる.式(19) を次元のある貯留方程式に変換すると式(21)を得る.

$$s_{h,s,i,\delta} = \frac{p_s}{1+p_s} \left\{ \frac{l_{s,i,\delta}}{\alpha_{i,\delta}} \right\}^{1/p_s} 1000^{(p_s-1)/p_s} q_{h,s,i,\delta}^{1/p_s}$$
(21)

 $s_{h,s,i,\delta}$: 貯留高 (mm) $q_{h,s,i,\delta}$: 流出高 (mm/hr)

4. 等価周波数伝達関数を用いた集中化

4.1 斜面域における等価周波数伝達関数の誘導

式(22)~(24)を考える.

$$r(t) = \overline{r} + Be^{j\omega t} \tag{22}$$

$$q_{s,i,\delta}(t,x) = \overline{q}_{s,i,\delta}(x) + C_{s,i,\delta}(x)e^{j\omega t}$$
(23)

$$h_{i,\delta}(t,x) = \overline{h}_{i,\delta}(x) + D_{s,i,\delta}(x)e^{j\omega t}$$
(24)

j: 虚数単位 ω : 周波数

 \overline{r}, B は、平均降雨量および定数である.また、 $\overline{q}_{s,i,\delta}(x), \overline{h}_{i,\delta}(x)$ は定常状態における単位幅流量、水深を 表している. $C_{s,i,\delta}(x), D_{s,i,\delta}(x)$ は、未知の複素数である. 式(23)~(24)を式(1),(2)に代入して式(25)~(26)を得 る.

$$\overline{q}_{s,i,\delta} = \overline{r}x\tag{25}$$

$$\frac{dC_{s,i,\delta}}{dx} + \frac{j\omega}{p_s} \left\{ \frac{(\overline{rx})^{1-p_s}}{\alpha_{i,\delta}} \right\}^{1/p_s} C_{s,i,\delta} = B$$
(26)

$$C_{s,i,\delta}(0) = 0 \tag{27}$$

 $r(t) \sim q_{s,i,\delta}(t, l_{s,i,\delta}) / l_{s,i,\delta}$ 間の等価周波数伝達関数 $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ は、次式によって定義される.

$$Z_{s,i,\delta}(j\omega) = \frac{C_{s,i,\delta}(l_{s,i,\delta})}{Bl_{s,i,\delta}}$$
(28)

したがって,式(26)~(28)より次式を誘導できる.

$$Z_{s,i,\delta}(j\omega) = e^{-j\omega t_{s,i,\delta}} {}_1F_1[p_s, 1+p_s, j\omega t_{s,i,\delta}]$$
(29)

$$t_{s,i,\delta} = \left\{ \frac{(r)^{1-p_s} l_{s,i,\delta}}{\alpha_{i,\delta}} \right\}^{1-p_s}$$
(30)

$${}_{1}F_{1}[a,b,c] = 1 + \frac{ac}{b} + \frac{a(a+1)c^{2}}{2!b(b+1)} + \frac{a(a+1)(a+2)c^{3}}{3!b(b+1)(b+2)} +$$
(31)

式 (29) の $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ のパラメータは式 (30) の $t_{s,i,\delta}$ である. これは、平均降雨量 \bar{r} の斜面における到達時間になっている.

4.2 遅れ系の導入

斜面域においては、 $r(t) \sim q_{s,i,\delta}(t, l_{s,i,\delta})/l_{s,i,\delta}$ 間の等価 周波数伝達関数 $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ を誘導することができた.こ の等価数端数伝達関数を直接用いて流出計算をしようと すると次式を用いることになる.

$$q_i(t) = \int_{0}^{\infty} r(\tau) z_{s,i,\delta}(t-\tau) d\tau$$
(32)

$$Q_i(j\omega) = R(j\omega)Z_{s,i,\delta}(j\omega)$$
(33)

式(32)の $z_{s,i,\delta}(t)$ は、 $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ のインパルス応答関数 である.また、式(33)の $Q_i(j\omega)$, $R(j\omega)$ は、 $q_i(t)$,r(t)の フーリエ変換関数である. $Q_i(j\omega)$ をフーリエ逆変換す ることによって $q_i(t)$ を計算できる. 式(32), (33) は表現 形式が異なっているものの,本質的には同一の式である. 式(32), (33) は,式(1), (2)を集中化しているが,これら の式を用いて流出計算をするのでは等価周波数伝達関数 を求めた利点がない.

図-5 の実線は,式(45)の値を式(29)に適用した $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ の周波数特性を示している.(A)は、ベクトル 軌跡を表し、 $R_e[Z],I_m[Z]$ は、 $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ の実部、虚部 を示す.(B)、(C)は、それぞれゲインと時間遅れを表し ている. $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ は物理系の一つである流出系の等価 周波数伝達関数なので、その周波数特性は図-5 に示す ように低域フィルターの特性を有している.一方、式 (34)、(35)に示す遅れ系の周波数特性も低域フィルターの特性を有している.

$$G_{1,i}\frac{d^3q_i}{dt^3} + G_{2,i}\frac{d^2q_i}{dt^2} + G_{3,i}\frac{dq_i}{dt} + q_i = r(t)$$
(34)

$$\left[\frac{d^{m}q_{i}}{dt^{m}}\right]_{t=0} = 0 \qquad m = 0, 1, 2$$
(35)

$$G_{1,i}, G_{2,i}, G_{3,i}$$
:正の定数

式(34),(35)の周波数伝達関数は、次式によって与えられる.

$$Z_{q,i}(j\omega) = \frac{1}{1 - \omega^2 G_{2,i} - j\omega(\omega^2 G_{1,i} - G_{3,i})}$$
(36)

 $Z_{q,i}(j\omega)$ が $Z_{s,i,\delta}(j\omega)$ を近似するように定めた $G_{1,i},G_{2,i},G_{3,i}の値は、次式によって与えられる.$

$$G_{3,i} = j \left[\frac{dZ_i}{d\omega} \right]_{\omega=0}$$
(37)

$$G_{2,i} = \frac{1}{2} \left\{ \left[\frac{d^2 Z_i}{d\omega^2} \right]_{\omega=0} + 2G_{3,i}^2 \right\}$$
(38)

$$G_{1,i} = \frac{1}{6} \left\{ -j \left[\frac{d^3 Z_i}{d\omega^3} \right]_{\omega=0} + 12G_{2,i}G_{3,i} - 6G_{3,i}^3 \right\}$$
(39)

式(37)~(39)の詳しい誘導過程については,文献(2)を参照されたい.式(29)を式(37)~(39)に代入することによって式(40)~(42)を誘導できる.

$$G_{1,i} = \frac{(1-p_s)t_{s,i,\delta}^3}{(1+p_s)^3(2+p_s)(3+p_s)}$$
(40)

$$G_{2,i} = \frac{t_{s,i,\delta}^2}{(1+p_s)^2(2+p_s)}$$
(41)

$$G_{3,i} = \frac{t_{s,i,\delta}}{(1+p_s)} \tag{42}$$

式(9)の値を採用すると、 $G_{l,i} < 0$ となり斜面域では2次の遅れ系を考えると十分である.

次に、式(43)の値を用いた計算例を示す.



 $\alpha_{i\,\delta} = 1800(m^{1/3} / hr)$ $l_{c,i,\delta} = 1000(m)$ (43)

図-6(A)は採用した降雨波形と式(1),(2),(43)による ハイドログラフを示している.(B)の実線は、(A)の計算 結果と式(17)を用いた s~q曲線を示している.破線は 式(21)を表す. 式(21)の貯留係数の値は式(44)のように なる.(C)の破線はこの貯留関数を用いた流出量を示し、 実線は(A)のハイドログラフに等しい.

$$k = 7.0(hr^{3/5}mm^{2/5}) \tag{44}$$

図-6(A)の総降雨量は 26(mm)で、出水の継続時間を 20(hr)として平均降雨量 r = 1.3(mm/hr) を得る. この値 と式(43)を式(30)に適用して次式を得る.

$$t_{s,i,\delta} = 10.1(hr) \tag{45}$$

さらに,式(45)の値を式(41),(42)に適用して式(46)を得 る.

$$G_{2i} = 4.0(hr^2)$$
 $G_{3i} = 3.8(hr)$ (46)

図-6(D)の破線は、式(34)、(46)より求めた流出量を表 している. 実線は(A)の kinematic wave 式より計算した 流出量を表す.

図-5 の破線は、式(46)のG_{2,i},G_{3,i}を式(36)に代入 $(G_{l,i}=0)$ して求めた $Z_{a,i}(j\omega)$ の周波数特性を表してい る. (C)の時間遅れにおいてω>1(1/hr)の範囲で実線の 値と破線の値に差があるように見える.しかし、(B)の ゲイン図を見ると $\omega > 1(1/hr)$ の範囲で $G(\omega)$ が減衰して (C)のω>1(1/hr)の範囲で実線の値と破線の値との差を 無視できる.

5. まとめ

図-6(C),(D)に示すように、二つの集中化手法より得 られたと貯留関数法と遅れ系による流出量の計算結果は, kinematic wave 式の流出量ほぼ一致していると言える. 二つの集中化手法の本質的な相違点をまとめると以下の ようになる.

- (1) 空間平均法による集中化手法では、式(21)に示すよ うに貯留係数が、 $\alpha_{i,\delta}$, $l_{s,i,\delta}$ の関数になっており、降 雨量に関係していない.
- (2) 等価周波数伝達関数と遅れ系による集中化手法では 式(30)の到達時間がパラメータになっており、 \bar{r} も 式(45)の係数*G*_{2,i},*G*_{3,i}に関与している.



図-6 流出量の計算例

謝辞 本論文は、実践水文システム研究会の研究補助を 受けたものである.関係各位に謝意を表します.

参考文献

- (1) 例えば、松林宇一郎、高木不折、古田直:不飽和浸 透流理論に基づく斜面流出モデルの集中化について, 土木学会論文集, No.497/II-28, pp11-20, 1994.
- (2) 藤田睦博, Surakha Wanphen, 田中岳, 清水康行:モ ーメント法による流出モデルのパラメータの同定と Kinematic Wave 式に基づくパラメータの評価, 土木 学会論文集, No.733/II-63, pp1-20, 2003.